

白い翳

有森信二



五階のリハビリ病棟は明るかった。母の病室のドアは全開で、廊下を挟んで向かい合ったりハビリ室のドアも開け放たれており、風がリハビリ室から病室へ、病室からリハビリ室へと吹き流れていた。

流れているのは空調の風だった。隣ビル側のサッシ窓は開錠できない作りであるので、初冬の凍てついた外気はフロアのどこにも入り込んでいなかった。

リハビリ室全体に用いられている卵色の色彩が、廊下や母の病室を明るく照らしていた。病室の中は、ベッドの周囲のカーテンも、通路側のカーテンも開け放たれており、階段を上って来た健治の目には、病室には誰もいないのだからかと訝ってしまふほど広く見えた。

五階病棟は重篤期を脱した回復患者のためのフロアであり、午後の食事が終わったばかりの時間でもあるからか、六人部屋の三つのベッドに人影はなく、掛け布団は半ば巻き上げられた恰好になっていた。

「菅原さんの状態は、予断を許しません。変化に沿って、出来るだけのことではありますが、先のことは今は何も分からないとしか言いようがありません」

主治医は、熱や菌の状態を細かに観察し、腎機能や心臓の状態に著変がないように努めているとの説明をし、若い医師とどこか引き攣れた表情で領き合いながら、看護師たちに早口で指示をした。

ところが、五日間の危機から脱した母は、あつけないほど早く意識が戻り、一か月と経たないうちに一般病棟に移され、現在では軽症者が入るリハビリ棟に移されている。

「歩く足が随分軽そうだね」

「杖の使い方にコツがあるのさ」
少し風邪気味の鼻声ではあるものの、三か月前の危機的状態は何だったのかと思わせるほどの、回復ぶりである。

母は四年前に大腿骨折をして手術、リハビリの後退院し、一年近く一人で自炊をしながら、家事もこなしてきた。五年前には心臓のペースメーカー埋め込みの手術をし、以前は心臓弁置換手術や、初期の子宮癌の手術もした。

「福岡に出て来てもらえないかな。どうだろう」

骨折後の危なっかしい一人暮らしを見るに見かねて、健治は母に提案したのだが、「冗談じゃない。あたしの居場所はどこしかないんだ」とにべもなかった。

以前来たときは、六つのカーテンが固く閉ざされていたのだった、と思いながら入口を入ったばかりのベッドに母の姿を見付けた。毛布一枚を羽織り、伸びた白髪の頭がひしゃげて向こう向きに横たわっていた。

眠っているのだろうか、小声で呼ぶとすぐに目を開き、おおと寝返り、そこに腰を下ろせと場所を示す。

丁度トイレに行こうと思っていたと言い、片手を梃子にして起き上がり、枕元の杖を掴み、ひよいと降り立った。

寝癖のついた髪を立てたままトイレに向かったかと思うと、すぐに済ませた。

「今日の海は時化とつたろう」

「かなりうねってたね。で、その後具合はどう」

「えらく調子いいんだよ。どうしたんだろう。体が軽い。深く眠って、すっきり目覚めた気分なんだ」

「その話、何度も聞いたよ。奇跡なのかもしれないけど、何かかって」

三か月前には、肺が重篤な機能不全に陥っているということで危篤を告げられ、健治たち身内の者が急ぎ呼び集められた。意識がなく、自力呼吸も出来ない状態が五日続いたのだった。

医師たちが足早に出入りする中、集中治療室の人工呼吸器に繋がれ、いくつもの計器が動き、点滴の早く落ちる音がことの厳しさを物語っていた。

「あたしは此処に嫁いで来た。動かるもんか。父さんも先祖も皆眠つとらすこの島を離れたら、罰が当たる」

こんなやり取りを何十回とした。

心臓の手術、子宮癌の手術、心臓ペースメーカーの埋め込み手術などの度に、福岡の病院に入院し、長期間を過ごしたのであるが、退院後は時間を争って島に戻った。

確かに、八十数年の間住み慣れた場所を移るのは好ましくはないのだろうが、病院や看護や身の回りのことを考えると、必要な施設が多く整い、健治たちの目が十分行き届く福岡に来てもらえないかと望むのであるが、母は頑として首を振らない。

母とは、幼い頃からことあるごとに意見が対立し、加えて健治が虚弱でもあったので、母が期待する農業を継げず追われるかたちで島を出ることになった。言葉のやり取りも激し、将来も絶対島には戻らないということで、十八歳で福岡に出た経緯があるので、福岡に移ってほしいという話には、母も「何を、今更」という強硬な態度を示した。

しかし、「子供は、いつまで経とうが子供」という考えの方は、どういう事情が生じようと、どういう経過があるかと捨てることなく、島の医院からの紹介で、福岡の大病院や総合病院への入院を頻りに繰り返して、その度に健治は、迎え、受け入れ、仕事の間を縫い見舞ってきた。

に触れながら、遠い時代の人々の息遣いに思いを馳せることを、定年後の自分のライフワークにしたいと思いついてきた。そして、出来ることなら、島に一人住む母にも、せめて老後には古都のゆかしさを肌感じてもらえたらと思いい、何度となく誘いかけてみたのだった。

母は医師たちが首を捻るほどの危機を、さらりと乗り越え、八十七歳になったばかりである。

少し風邪を引いたと喉のあたりを撫でたが、適切な処置が施されているのだろう、血色は悪くない。入院中であるから、寒さも感じることはなく、三十七度を連日越えたこの夏の厳しかった暑さも知らないと言う。

なにしろ、今回の入院は十か月に及んでいる。三か月前の五日間は瞬きすら出来なかったのに、今は鼻に細い管が残っているだけで、表情は完全に元に戻った。出される食事も普通食であり、殆どを残さず食べている。

「今日の食事は味がしない。風邪のせいだろうかね」

「それだけ食べられるんだ。二、三日様子を見るさ」

健治は食事のトレイを置き場に運び、病室に戻った。「ところで以前、あなたは、うちの子じゃないのではないかと言うとしたが、どういう意味じゃる」

ベッドに背筋を立てて座り直し、向かい合う恰好になると、母はこのときを待っていたのかと思えるほどの間合い

母は、子供が親の世話をするのは当たり前という考えであり、見舞いに日参する者がいることを、病室の皆に自慢するという挙にも出た。見舞った後、健治が再び残業の仕事に戻ると知りながらも、身の回りの用務を言い付けることを忘れなかった。

健治は三年前に定年を迎えたのを期に、細々と続けてきた史跡を巡る会の責任幹事を引き受けており、出来れば母を福岡に呼んで、これまでに積み重なってきた蟬せみりを些かでもほぐしながら、日を送りたいと考えていた。

健治が住む町は、一四〇〇年の昔に朝廷の出先機関としての役割を与えられ、役所が置かれた。役所には中央の高官が招かれ、西国の統治に当たるとともに、大陸との窓口の役割を担った。その名残が至る所に留められており、町全体が特別史跡に当たると言ってもよい。

史跡を巡る会は、史跡の保全、学び、一般市民への案内等の役割を担っており、学識経験者が中心になり、史跡の保全や学びに係わりたいという市民らで組織され、中でも一般市民への案内を主な役割としている。

健治は史跡歩きを企画、実施する責任幹事としての役目を担当し、四季の古都のコースを歩き巡りながら、参加者に史跡の紹介や説明を行っている。

この町に住んで四十年になり、勤務の傍ら古都の佇まい

で聞いてきた。危機に陥る以前に見舞ったとき、健治が幼い頃に可愛がられた覚えがないという話をした。そのときは、「忙しゅうて、忙しゅうて、とにかくつかったもんじゃから」と答えたのだった。

子供の頃、雑誌がほしいと頼んでも、子供の寝屋になっっている物置部屋を仕切ってほしいと頼んでも、一つとして叶えてくれず、というか聞く耳を持たなかった。近所に遊びに行くことも、まして泳ぎや、魚釣りに行きたいと言っても「そんな段じゃないだろうか」の一声が返ってきた。

せめて、西瓜ぐらい作ってほしいと頼んだものだが、それさえも無視された。周囲の農家では、夏場の子供たちの楽しみのためにと、殆どが作っていた。夏に、近所から一玉、二玉分けて貰って食べる西瓜は、甘くて、みずみずしくて、子供にも大人にも何よりのご馳走だったのだ。

忙しかろうが、きつかりうが、金があるうがなかるうが、苗の二、三本を植えておけば済むことである筈なのだが。

ただし、芋の苗は幾畝にも植え付け、絶やすことなく母が蒸し、欠かせない副食となった。そんなことを思い出し、話のついでに口に出したのだった。何故、あんなにも子供の言うことや、頼みごとを頭からどやし付けたのだったろうかと、一度聞いてみたかったのだ。

「どういう意味と言われても、何故だか分からんけど、自

分はうちの子じやないんじやないだろうかと、いつかそう思い込んどった」

健治は、きつと菅原の子ではないのだから、遊びにも行かしてくれないし、小遣いもくれないのだろうと思つた。小学校の図書室の少ない本の中から一冊借りてきて、夕飯の後に電灯の下で広げていても、「そげな本読んで、どげんするとか」と睨まれ、叱責された。

「感想文書かんならん」

それでも答えないと、逃れられない。

「学校のことは学校でせなならん。家は勉強するところではないじやろ」

「間に合はんけん」

「そんなにしてまで、学校の都合に合わせることはなか」

「じゃあ、成績が下がる」

「下がつても構わん。だいたい勉強は学校でするもん。本なんぞというものを讀んだりするから、くだらん知恵が付いて、魂なしの遊び好き人間になる」

「宿題なんやけど」

「すぐに宿題じや、勉強じやと言う。遊び人の口実じやろ。あたしたちはつい先だつてまでの戦時中、『国破れて何の教育ぞ』と習つたもんだ。シズ婆さんも同じ意見ぞ。お前は長男のくせに、いつも屁理屈ばかり言うて親に逆らう」
母には何を言つても通じない。

か何やらで、働き手を毎日毎日日暮れまで、学校に取られるちゆうによ」

職員室に地下足袋で上がり込んだ親父は、麦藁帽子をあみだに被り、教頭に向かい、怒鳴り付けたという。恐らくこの手の苦情に初めて出食わしたであろう学校側は、一言も弁明出来なかつたそうだ。

親父が学校の帰りに、うちの父に戦果の報告に寄つたのだった。

「どげえ、思うな」

「ほう、そらあ理屈は理屈たい。そいで、春子は承知したとかいな」

「どげもこげえも、俺がうんと言わんこつには、隣り村にも行けんじや。当つたり前のことじやろ」

この成り行きを横で聞いて感激したのが、母だった。首を十数回も振りながら「子供は、口答えするようじやいけん。そう騒るのが、親の責任ですたい」と、父を横にどかせ、親父と喋り合つた。水汲みから戻つた健治が障子の奥で聞いているのを知っているからか、殊更に声高に喋つた。

学校から帰ると、必ず母の書き置きがあつた。上がり櫃の三畳に飯台があり、笹に芋が盛られている。食えばすぐに「学校下の田に来ること」とある。朝、田の草が目立たんうちに取らんといけんと言つていた、と気付く。

「それより、平屋敷のトツシヤンを見てみ。一家総出で田の草取りさ。決まつて学校に行く前の一時間、先頭切つて働きよらす。それに比べうちは情けないもんたい。同じ長男でありながらな。もう小学六年ぞ。昔なら、尋常小学校を卒業したら一人前なんぞ。お前は、トツシヤンより一級上じやないか」

とくる。何かにつけて、平屋敷のトツシヤンを持ち出すそれは、トツシヤンは働き者に違いない。勉強の方はあまり出来ないが、親の言うことには絶対服従するからだ。

その親父からして強烈な理屈を言う。トツシヤンの姉である中学二年の春子が、中体連の百メートル走で優勝したという。優勝者は、晴れて島全体に当たる十か町村の郡を代表して、長崎の本大会に出場することが出来る。春子は興奮気味に、家で報告したに違いない。

「ばつかもん」といきなり春子を怒鳴り付け、親父さんはすぐさま中学校に走つた。

「何ちゆう決まりになつてるのか。うちの娘を拐かそうつてのか。そりやあ、先生たちにとつちや嬉しかことだろ。誉れたい。給料も上がるじやろ。ところが、こちとらとはとんだ迷惑だ。一遍でも長崎の街を見せてみい。そうしたらどうなるか。街の方がええ、言い出すかもしれん。そんなら、どう責任とつちくるのか、というこつたい。こちとら、一銭の得にもなりやあせん。ただでさえ、部活奨励と

九つ下の妹の雪子は、畦の籠に一人入れられ、泣き疲れていることだろう。草取りか、雪子の守りか。いずれにしても、すぐに駆け付けねばならない。学校が引ける様子は、手前の田から真正面に見えているのである。

「遅かね」

田に着くとまずこうだ。ご苦労さん、とか悪かね、という言葉を聞いたことがない。

「平屋敷のトツシヤンは、一時間前には来た。ほうら」

なるほど、五枚下の田に白い野球帽を被つたトツシヤンがいる。奴は下級生だし、第一クラス委員など何一つ引き受けないのだから、放課後の掃除見回りの役目もないのだ。

母にそう言うと、「利口な選択だよ」と健治の方が詰られる。「雪子は丁度寝とるから。この田一枚、とにかく今日中に終わらせんば」と、いきなり健治の手を力まかせに掴んで引つ張り込む。

裸足のまま水田に入り、屈み込んで草を取る。一度取り終わつたばかりで、草はたいして伸びていない。「油断しとつたらすぐに伸び放題になる」母は田の端の方に十歩ばかり移動し、モンペの尻をまくつて小便をし、すぐに戻つて来た。

「日暮れまで四時間。絶対終わらせにやあ」

四時間といつたら、八時近くになる。この季節は八時近くまで明るいので、足元が見えなくなるまで続けるのだ。

草取りは最初のうちはいいが、一時間もすると腰が痛くなり、痺れ出し、姿勢が崩れてくると稲の葉に顔をさんざん刺される。まだ小学六年だから、ただ屈んでさえ稲の葉に被さる恰好になるのだが、腰が痺れ、足に力が入らなくなってくれば、顔も目も尖ってざらつく葉先で切り付けられてしまう。

五時のサイレンが鳴る。役場のスピーカーから、淋し気な歌が流れる。立ち上がってみる。反動で後ろに引っ繰り返りそうになる。ようようバランスを取り戻して立った。

二メートルほど目の前を、黒いものが横切った。蛙でも飲み込んだか、腹が異様に太い青大将が、ゆっくりと長い体を滑らせて行く。

「ここいらには、ようおるな。雪子の籠の近くで、昼寝しとった奴かいの」

母は青大将にはまるで頓着ない。気を付けるのは、畦の草の中などに丸まっている蝮だけである。蝮は自分から向かっては来ないからと言いながらも、知らずに尻尾を踏み付けたりして噛まれないよう、注意しろと言う。

「月給取りはええな。これで仕事が終わるだよ。僕も月給取りになりたい」

「バカ言うたらいかん。長男のお前が田畑を守らんでどうする。ちよつとでも気を抜いてみい、先祖から引き継いだ大事な田畑がすぐに草原になっちゃうぞ。世間のもの笑い

との隙に、するりと出てしまった。

口に出した瞬間は、健治の方が慌てて母の表情に変化が起きるのではないかと、顔色を注意して見詰めたのだった。理解したのかしないのか、母は眉一つ動かさなかった。ひよつとしたら、健治が帰り支度の間際に言ったことで、老齢の耳には届かなかったのかもしれない、と半分希望的観測を抱いてもいた。

「つまり、この子ではないということだろう。ならば、余所の子ということになるじやろうか。余所の子だったとしたら、どういうことになるうな」

健治は、母の子ではあっても、何か生まれて来るに都合のよくないことがあったのではないだろうか、というかなり説明に苦しむ内容で長い間悩んで来たのだったから、健治の方がどう切り出して行くべきか、言葉に窮してしまつた。自分なりに、子供の頃から考えて来たのは、母のある言葉からだった。

「いったい誰に似て、こんな癩癩持ちなんじゃろ」

「生まれて来たもんを、今更腹に戻す訳にはいかんしな」

言われたのは何をしでかし、どんなところでだったのだろうか。正確な回数までは覚えてはいないが、何度も、いや何十度となく言われ続けた。

どうして気にして来たかと言うと、健治が生まれる半年前に亡くなっている祖父が、無類の癩癩持ちだという話を

になる。そうなりやあ、誰にも申し開きがたたん。ええか、こんなだらしないう事、二度と口に出すもんじゃない」

母の機嫌が途端に悪くなる。青大将の行方を目で追い、雪子の籠とは反対の方角に姿を消したのを見届け、「腑抜けの百姓ちゆうこつば教えたやろう。目の前の仕事を放つたらかして、すぐに遊びごとに目移す百姓のこつた

い」といつもの小言が始める。

「分かったよ。分かったから、足元が見えるうちに帰ろうよ。今日は二匹目だよ、蛇を見るのは。今の奴、胴体が丸く膨れ上がった。気持悪いよ」

「百姓の子が、それも長男が、青大将を見て怖じ気付いとつてどうなる。トツシヤンたちも、一反歩の田の全部を今日に片付けるつもりのごたる。うちもこの一枚を途中で止めるわけにはいかんじゃろ」

「以前に、うちの子じゃないのではないかと言うもつたが、どういう意味じゃろ」

もう一度繰り返した。目は笑っているが、蒼い唇が心なしか震えている。これには一言では答えられない思いが健治にはあるのだが、あるいは今回の入院が最後になるかも知れない母に、出来れば言いたくはない言葉だった。

「もういいではないか」と何度も躊躇つた末であったが、見舞いの帰りの、今にしてもうまく通わない会話のちよつ

と度か聞かされたからだった。祖父は四十九歳の盆過ぎ、つまり健治が生まれる半年前に死んでいる。

何故死んだのかという詳細は聞かされたことがなく、聞くのは「朝になつても起きて来ないので寝屋を覗いたら、冷たくなつていた」ということと、「盆の墓掃除のとき、俺はここから帰らない」と言つたという二つだけだった。

後、祖父のことは殆ど話題に上らないのであったが、あまりに癩癩が過ぎるため近所との付き合いが出来ず、息子である父には「俺には叶わんことじゃけど、お前はせめて近所と仲違いをせず、出来ればみんなの世話役ぐらい努めるようになってくれ」とかねがね言つていたというものであった。

それ以外に祖父を語るものは母からは聞かえて来ず、親戚の誰かが、「学問好きの変わり者でな、近所の子らに詩や歌や読み書きを教えていたこともある。とにかく好き者でな。ここが小屋の跡さ」と言い掛けたものの、母の顔色を見て口を噤んでしまつたのだった。

健治は腺病質な質で、母がよく、誰に似てまあこんなに弱いんだろ、と溢していたのを覚えてる。その度に健治は、楽天家で鷹揚な性格の父は、ひよつとして自分の父ではないのではないかと、と何故か思つたものだった。その直感の先にあるのが、祖父だった。

写真もない。学問好きで、文学好きだったというのに筆

一本、本一冊も手元がないというのが腑に落ちなかった。健治は、父が嫌いだっただけではない。父は細かいことに頓着せず、祖父の期待どおりに、二十代から村の青年団長だの、煙草耕作組合支部長だの、多くの役を引き受け、ほぼ毎日、日が落ちる前に田畑の作業を切り上げ、会場に赴くのだった。父が帰って来るのは、毎晩十時を過ぎ、決まって五、六人の酔客を連れて来た。それから、十二時近くまで賑やかに飲んで、騒いだ。

いつの頃からそんな考えになったものか。自分でもしかとは分からないが、やはり健治自身の結婚を境に、動かし難いものになったと言っただけ。

つまり、寝屋の具合だ。父と母は終戦後、父が南方から引き揚げて来たと同時に一緒に住んだ。二人は、祖父の知り合いの肝煎りで紹介され、添うことになったらしい。

豆電球一つを灯した寝間に、二十一歳の母が昼間の作業に疲れて横たわっている。芯から眠ってはいないのだが、激しい作業の後だから、つい寝入ってしまう。夫は、毎晩夜が更けねば戻らない。

刷りガラスの戸一枚隔てた奥の間に、祖父が寝る。終戦の八月に妻である祖母を亡くしている。妻である祖母は四十五歳だった。虫垂炎という平時だったら何ということも

ない疾病であるのに、空襲警報が鳴り響く敗戦間際のように、手術など施す術もなかった。祖父にはそれが、空しい思いとなって胸に残っている。口惜しいのである。

手を伸ばせばいつもそこにある、温かく柔らかだった妻の体がない。妻の体は、四人の子を生んだとはいえ、死の間際まで十分に応えてくれた。妻は、いつも洩れ出そうになる忍び声^{こゝろこゝろ}を必死で堪えていた。

今、隣の間には二十一歳の息子の嫁がいる。息子の帰りを待っているが、息子はどんなときでも十時より前には戻って来た試しがない。嫁は奥の間の自分を警戒しているのがありありと感じ取れるが、まだ娘だ。息子とのときは、声を抑えることもしない。布擦れの音も、若い体がたてる湿った音も、すぐ耳元で聞こえる。

嫁は薄物を纏って横になっっている。足を蒲団から、しどけなく畳に落としていることもある。腰巻きがややだけ、太股の奥の方まで見通せるときもある。

祖父は毎日晩酌をするので、一眠りした後決まって小便に起きる。便所に行くには、必ず夫婦の寝屋の隅を横切らねばならない造りになっっている。

先ほど小便に立ったときには、嫁は暑いだろう、薄物を少しはね上げ、白い脹ら脛^{はらば}を見せ、軽い軒をたてていた。睡魔には勝てないのだ。眠りに落ちるまいと抗おうとしてのことか、奇妙なかたちに体を振らせている。

傍に寄って薄物を掛けてやりたい衝動に駆られたが、懸命に自制した。そのまま音をたてないように、ガラス戸の奥の布団に戻り大の字になった。自分のものが、そそり勃つている。妻が傍にいた二年前までは、この勢いのまま互いに慰め合ったものだった。

息子はまだ一時間は戻らない。「ウウム、ムムム」と、嫁が夢に魘されたのか、微かな声をあげた。「フウウ、ウウ」と、今度は苦し気な歯音になる。どこか、具合でも悪いのではなからうか。畳の上で胸を掻き掻きしているのかもしれないではないか、と心配の方が先にたつてきた…。

この場面が、いつか健治の脳裏を占めて離れなくなった。後のことは考えない。コマを送りたくない気持で、この場面が湧いてくる度に必死に思いを払った。払うつもりで、コップの酒を無理に流し込んだ。

「いったい誰に似て、こんな癩癩持ちなんじゃろ」「生まれて来たもんを、今更腹に戻す訳にはいかんしな」

何度も聞いた母の声が、耳に響いてくる。思い出す度に、酔い潰れるまで飲んだ。いったい自分は、本当に父の子なのだろうか。

こんなことは、誰に聞いても教えてもらえないだろうし、聞くことも出来ない。

健治が小学一年のときまで家の二階に寝起きしていた父

の妹である叔母の幸子も、祖父については何も教えてくれなかった。虫垂炎で死んだ祖母、すなわち彼女の母のことでは、話し出すと決まって大粒の涙に噎ぶのであったが、父である祖父のことは、何も言っただけではない。

健治の脳裏には、家の寝間に横たわる母、ガラス戸一枚を隔てた奥の間に寝る祖父、二階に暮らす叔母、それに十時までは戻って来ない父たちのそれぞれの息遣いまでが、定められた配役を、忠実にこなしているのだろうとしか思えないほどに明瞭に映った。

酔って帰った二十五歳の父は、酔いの勢いにまかせ、二十一歳の母に挑んだに違いない。母は母で、戻って来た父を安堵の思いで受け入れたのだろう。二階の叔母にも、そうと知らしめるつもりで。

父は、健治を自分の子と信じて疑ったことなどない筈である。母の腰巻きを荒々しく剥ぎ捨てるのを、誰にも邪魔されることなどなかった筈なのだから。

誰からも聞かされないのは、祖父の死のことである。癩癩持ちだったとはいえ、少し血圧が高いというだけで、他に持病らしい持病があったという話はない。

健治が生まれる半年前の九月二十七日という死の日が、苔が貼り付き鳶の這う墓石に彫られているのを、かろうじて読むことが出来るが、六十年を越える月日を経た今、字

面は崩れ、流れ去ろうとしている。病名も聞かない。今で言うなら、心筋梗塞か脳血栓か、という類いであろうけれど…。

祖母の死因である虫垂炎のことを、皆が何度となく話題にし、叔母などはその度に涙するのであったが、祖父の死因に触れる話は誰の口からも出ない。

いわゆる突然死だという言い方で伝えられているが、母から、菅原では、都合の良いくないことは一切口外しないというやり方で通すということを、健治が十八歳で家を出るまでずっと教え込まれてきた。

祖父の遺品の一つ、写真の一枚さえ残されておらず、周囲の誰に聞いても黙ってしまう。それは、申し合わせたとでもいうべく、誰もが首を振りもせず、良いのだとも悪いのだとも一言も発しないのだった。

ただ、健治が幼い頃には祖父の弟が生きていて、田舎者には珍しい、面高の顔付きをしていた。彼は吉野という分家を起こし、源爺と呼ばれていた。今にして思うと、まだ五十歳前だったことになる。性格が粗暴で、酒飲みで、身勝手なものの言いをするからと、母たちが敬遠していたためか、百メートルの距離で修繕屋をしていたのに、めったに会うこともなかった。

若い頃は、周囲に聞こえるほどに女出入りが激しかったという噂だった。女を追って、福岡や長崎に何年も流れ住

んだと聞いた。福岡から連れ帰った妻に逃げられ、十年も鰥夫暮らしをしたこともあるという。

源爺は、健治が小学校に上がるか上がらないかの頃に、胃癌という健治が初めて聞く病気で寝込んだと聞くと、二か月も経たないうちに五十一歳で死んでしまった。

人の死に会ったのは初めてであったから、健治も興味半分で覗きに行つたのであるが、顔に白い布を被せられ、布の鼻の辺りだろう部分が高く盛り上がっているのを、奇妙な思いで眺め、皆が忙しそうに出入りするので、走り戻つたのを覚えている。

祖父本人の面影を考える上でのモデルは、この源爺が最も適切だということになるが、もう一人、法事などに決まつて現れる、農家にはあまり見ないつましやかな美形の婦人がいた。

母は婦人が現れても多くを話すことなく、父も簡単な時候の挨拶が終わると焼香をしてもらい、行事が済むと婦人は静かに姿を消すのだった。

婦人は祖父が結婚前、最初に生ませた子だそうで、祖父の回忌には欠かさず出席していた。

墓地には、父の妹という人の石も置かれていたから、祖父の子は、最初が婦人、二番目から五番目、つまり父や叔母たちまでが四十五歳で死んだ祖母の子…と考えているうちに、全てが納得の行くことに思われてきた。

源爺より三歳上で、多分村では娘たちの多くを虜にしたであろう文学青年であったという祖父。自ら発起したらしい短歌の会でも、幾人かと情を通じ合ったという。その中の一人に生ませた子が、婦人であるというのだ。

家業を疎かにし、かつて文学という遊びに毒され、村の娘たちを酔わせたらしい祖父を、癩癩持ちだからという例えで話す母…。

これらは、健治が微かに聞こえてくる島からの風聞により、一人想像したことには過ぎない。

母は、健治が父との間に生まれた最初の子であると、くどいほどに言い募った。誰が考えても当然のことであろうことを、どうしてこうも強調せずにはいられないものかと聞かされる健治の方が訝るほどだった。

それとも、年を経るに従って、母はより確かに父との間に長男を儲けたのだ、と周囲にも自らにも、強く言い聞かせていたつもりであったのかも知れないとも思えてきた。

祖父の死は、突然死だとしか健治たちには知らされていず、九月二十七日の朝（あるいは二十六日の夜）、祖父は四十九歳という命を閉じたのだ。

夜中に藻掻き苦しんだとも、血を吐いたとも、腹を下したとも何も聞かされていない。寿命であったのか、何かの意図が働いたものであるのか、推測する糸口がない。絶命

する間際の祖父本人でさえ、自分に起きようとする何が何であるのか、理解出来なかったのかも知れない。

父も、母も、叔母も、朝起きて来ないので奥の間を覗いて見ると、布団の中で冷たくなっているのを発見した、という事実を語るに過ぎなかった。それに加え、二か月前の盆前の墓掃除で、祖父がここから帰りにたくない、と言ったというくだりを繰り返すのだった。

「めったなことを言うもんでない。先のことを言い当ててしまふことになるからな」

母は、決まってそう続けた。事実そうであるのかも知れないが、同居していた父、母、叔母の三人が三人とも、祖父のことを話題にすることもないし、三人の誰に尋ねても全く同じ答えしか返ってこないのであった。

もう一つ、健治の記憶に残ることがある。

叔母は五歳の頃リウマチに罹り、命は取り留めたものの心臓弁膜症を患い、平らな道を歩くにも息切れがし、立ち止まっては喉を激しく鳴らし胸をさすっていた。健治は幼いときから二階の叔母の蒲団で寝ていたから、夜中に何度目を覚まし、低く呻いている叔母の背中を撫でてやったことかしのれない。しかし、発作が出ないときの叔母は、健治を両手でくるみ込むほどに可愛がってくれた。

結婚など出来ないだろうと言われていた叔母は、「ここにいたらみんなの迷惑になるし、自分で自分の生活を切り開いてみたいから」というので、隣の漁師村に嫁いで行った。健治が小学校一年の秋だった。

健治は叔母が去って行く車の後を追ひ、泣きわめいたのだった。

「姉ちゃん、サッチャちゃん、何で行ってしまったの。僕を一人ぼっちにして」

このときのことは、五十年以上経った今でもはっきり覚えていた。健治は叔母のことを「姉ちゃん」と呼んでいた。「おばちゃん」では余所余所しいし、「サッチャちゃん」では馴れ馴れしいから姉ちゃんと呼ぶことになったのだろうと思ひながらではあるが。

叔母は不自由な身でありながら、二人の子供を生み育て、子供たちに手が掛からない五十歳近くになって幾度目かの入院のとき、島の医師は「思い切つて、弁の置換手術を受けてみないか」と勧めたのだという。

島を出て福岡の役所に勤めていた健治の元に連絡があり、入院保証人になってほしいとの叔母からの頼みだった。幾日も悩んだ末に決心をして手術を受けることになったということと、福岡の大学病院に入院するので、土地勘のある健治にサポートをしてほしいということだった。

健治は港に叔母を迎えに出、大学病院まで付き添い、一

緒に病院側の説明を受けた。細かいところは理解出来なかったが、かなりのリスクを伴う手術であること、献血が必要であるが、成分献血という方法を用いること、患者と血液型が同じで、出来るだけ近い身内の者を探してほしい、ということだった。

そこで、身内三人を探し、健治もその一人になった。初めて聞く成分献血というものは、献血室の装置に張り付けられ、装置の中にいったん取り出した血液を流しながら、血漿と血小板を分離して採取し、赤血球や白血球を一部の血漿と共に体内へ戻す献血方法だという説明を受けた。

指定日には、採血装置に張り付けになり、体外に出た血液が戻って来るときの冷たさと息苦しさに耐えながら、二時間近くを冷え冷えとした採血室で過ごしたのだった。

三人の血液と叔母の血液との相性は、健治の血が一番良好だということで、叔母の手術に用いられることになった。このときは、ただそうなのかと思っただけだったのだが、残りの二人が叔母の実の子供と、健治の妹の雪子であり、どうして健治の血液が叔母の血液成分に最も近いのか、と後で考えて不思議に思つたものだった。

リスクの高い手術は幸い成功し、予後も順調な叔母の状態を見ながら、「姉ちゃん良かったな、頑張りなよ」と、二階の部屋で暮らしていた頃のことを思い出し、実の姉に寄り添っているのではないかという一か月足らずを過ごし

たのだった。

健治は、健治が生まれる半年前の冷えた朝のことを、いろいろなかたちで想ひ、考えてきた。いずれも何一つ確証を得たり、そのヒントになる風聞を得たりしたから、というものではない。

まず、酒である。夕食の膳に、二合ずつの爛が二本並べて置かれていた。しかし、いつものとおりこの時間には父は戻って来ていない。「今日は、間違ひなく早く帰って来ると言つてたんですが」母が謝り、一本を引つ込めようとしたが、祖父が制した。

祖父は母と叔母を前に、普段二合しか飲まない酒をいつもと変わらないピッチで四合飲み、食事の方は半分で済ませた。足を幾分ふらつかせながら、後刻のことを思い、心急ぐ思いを胸に仕舞い込んだまま、早目に奥の間に入り、夏布団を腹のあたりに掛け、横になった。二十一歳というのは、何ともいいもんだ。夢の中でそう考えたところで、意識がふいに遠退いて行つた。

原因は蝨である。蒲団に入り、急激に回つてきた酔いのため軀をかき、何度か寝返りした拍子に、足元にとぐるを巻いていた蝨が、祖父の足先で強く蹴られ、反射的に脹ら脛のあたりに牙を食い込ませた。風もなく暑さの残る晩であり、閉ざしていた雨戸を半分ほど開けたまままでいたため、

蝨は隙間から忍び込んで来ていた。

それだけでなく、天井の梁のあたりに、よく青大将が張り付いているのを見掛けたものだ。

こんな場合、当然医師が呼ばれたのであるが、戦後のどさくさがまだ終わらない頃のことであり、医師も脈と瞳孔の動きを確かめただけで突然死と診断した。という筋書きはかなり杜撰な話に過ぎないかもしれないが、島である田舎であればあり得ない話でもない、と思えるのである。

こんな妄想が埒もないことであろうことは置いて、折々に第二、第三の話まで創り上げ、その度に、こういう思考に至る自分を戒め、叱り付けて来たことであつた。

「どうして、急に死んだの？」

母に聞いたとき、眉一つ動かすことなく、「分からないんだ。こつちが聞きたいくらいだよ」という答えが返つてきた。そこには、さらに「どうしてだろう」とか、「もともと具合が悪かったの」と問い返すべき隙き間があるうとも感じられなかった。母の言葉にはいささかも動じたり、思案を続けたりするといった、躊躇いの糸口さえ見出せなかった。

父も、叔母も、同じことだった。それ以上聞こうとしたり、自分で家の中を探し回ったり、世間の風評を尋ねようという気にもならない、既に過ぎ去つた遠い日の一つの事実としてあることなのだ、と思わざるを得なかった。

本当に、誰一人祖父の噂をしなかった。何かのはずみに思い出話になったり、酔客たちが寄ったときでも、祖父のことに触れる話を持ち出す者もないのだった。

健治への母の嫉は厳しいものだった。長男であるということ、場所や時を選ばず、題目よろしく健治のうちに叩き込んだ。「長男ぞ」、「長男だから」、「長男のくせに」というテンションの高い母の声が、胸の底まで染み込んでいる。健治に対するマインドコントロールであり、母自身へのマインドコントロールであったのかも知れない。母にとって、菅原の家はそれほど抑圧される場所ではなかった筈である。姑は嫁いで来る二年前の終戦直前に死んでおり、舅の祖父は一年も経たない九月の朝に死んだ。別棟の隠居に住んでいた曾祖父母は、祖父の葬儀が終わり、三周忌が来る前に相次いで死んだ。小姑である叔母は、健治が小学校に入った秋に隣村に嫁いだ。

健治の耳の奥に、祖父や曾祖父母の回忌法要の折のものであろう鉦の音が、はつきりと残っている。和尚の読経の声までもが、こびり付いている。毎年毎年法要が営まれ、親戚から多くの人が集まって来たことも、奇妙にはつきり覚えていた。思い出すのは、座敷に座った和尚のダミ声であり、黒い袈裟の色であり、祖父の関係する親戚たちの化粧の匂いだった。それらは源爺の子供たちの派手なもの言

ませた。吉野を名乗った源爺も同じで、仕事を口実に福岡や長崎に流れ暮らし、福岡から嫁を連れて来たが、十年の間嫁に逃げられるという恥を世間に晒している。

反対に、近在に広く篤農で知られる原田の家の出である母は、これを最も嫌った。遊び人たちの家系の一人であると思われることを恥じ、これらの親族との縁を何とかして一つずつ消して行こうという緻密な計画を立てた。

母は質素儉約を旨とする考えを、母であるシズ婆さんから叩き込まれており、菅原や吉野の家の技芸好きで、世間に恥じるといふ気が希薄で、締まりのない放埒な空気が気鬱でならなかった。

変えねばならない、と思った。であるなら、実家である原田のやり方に習うのが一番だと思った。母の母であるシズ婆さんは、母自身も辟易するほど、気性が強く、近在に聞こえた五月蠅型であり、「シズさんのところには、嫁の来てなどなかるう」と世間に聞こえていたし、母自身が擲擲するほどであった。

菅原の曾祖父母、祖父が死に、小姑の叔母も嫁いで行った今、母の方針を遮るものはなかった。父などは、易々と手の上で転がされた。

母はもともと潔癖な性分であり、片付け魔ともいうべき質であり、そのまま子供たちと同じ考えを強いた。健治たちが着たものを脱ぎ散らしてでもいようものなら、一喝さ

いと、女たちの嬌声であったりもした。

母は法要の度に張り切っていた。苛立ってもいた。その事を完璧にやり遂げることと、祖父の関係する親戚の連中に笑われてなるものかという激しい思いと、自分がいかに有能であるかをしっかりと見せ付けるための働きに追われていた。そういう意味では、苛立っているというより、芝居を演じる緊張感と高揚感が混じり合った、達成感の方が多かったのだろう。

法要の進行、料理の準備、飲み物の準備、土産物の手配などの全てを入念に準備した。勿論、当日の役割は父を表に出し、自分は裏方に徹した。

「しつかり者の嫁ごだな」

親戚の連中は、口々に父にそう言った。父は飲み、座を盛り立てる役をこなせばよかった。酒の爛のつけ方が足りないと思つて、おい、と一声掛ければ母が間髪を入れず顔を出し、台所の酒が万が一足りないかも知れないと思うと、健治に酒屋までの使いを言い付けた。

菅原の曾祖父母、祖父、父に連なる家系は、末端の身分ではあるが士族であるということ、きつい農業に取り組むより技芸の道を好み、世間にも派手者として知られ、幾多の浮き名を流したらしい。

祖父は主宰した短歌の会で数人と関係し、一人の子を生

れた。挙げ句、すぐに指示に従わないと、六尺棒や庭箒で何発も叩かれたり、指に灸をすえられたりした。

食べるのが遅い。口にものを入れたまま喋る。掃除がなっていない。支度が遅い。仕事が鈍いなど、健治を頭にした子供に対しては徹底した躾をしようとした。「人が笑わす」、「恥ずかしか」、「性根が入ってない」と、シズ婆さんも交えて、篤農家のあり方というものを、骨身にまで教え込もうとした。

二人の篤農の教えというのは、家を辱めないこと、家の秩序を守ること、家業に励むこと、子供は親の指示に従うこと、質素を旨とすること、世間から後ろ指指されることがないこと、甘えは禁物であること、ということであったから、子供も時間の限り農作業に従事しないといけないのだった。

「勉強はせんで出来るのが当たり前ぞ」

というくだりもあった。家で教科書を広げたり、図書を讀んだりするのもこの篤農の教えに反していた。

「目が悪くなるから、本は一切読まないことにする」

ある日、母はそう宣言した。健治が小学五年生のときだから、まだ三十歳になったばかりである。母は、本当に目が悪いのだらうかと思つた。一番下の弟を生んだ後の肥立ちが悪く、心臓の動悸と息切れで苦しむようになっていたから、目も同じ産後のことから来たのだと思つたのだった。

息苦しいときは肩をすぼめて屈み、呼吸も絶え絶えになる姿を見ると、無理して本などを読んでよくないのだろう、と素直に思えたのだった。だから、健治は十八歳で家を出る前も、出てからも、母の目はいつか不自由になる定めなのだろうと、本気で思っていた。

しかし、これが母独特の表現による方便だとは、当時は思いもしなかった。

自分が率先して本を読まないと言明し、子供もそれに習えという無言の指示だったのだとわかったのは、つい最近のことである。母が八十歳近くになり、さすがに老眼鏡が必要になったというところで眼鏡屋に付き合ったことがあった。検眼のとき、「とても綺麗な目ですね」と医師に言われ、「目の健康には、十分に気を付けましたから」とすらりと答えた得意そうな言い方に、そうだったのかと思っただけは、健治なりの驚きであったのだが。

母の言葉は、一つの暗示を用いて先例を自ら作り、暗黙のうちに周囲の者を牽制するという方法をよく用いた。

「ねばならない」という断定的な言い方をすれば、後で証拠として残り、指弾をされることになりかねないという、これもシズ婆さんの篤農の教えのうちにあったのである。

例えば、嫁に対し、良いとか悪いとかについて、何も言わないという方法をとる。言うのは、「精一杯働くのは良いことだ」とか、「整理整頓に努めるのは何にも増して良

い」といった建前だけである。「何々が悪い」ということは一言も言わないのだから、相手に付け込む隙を作らないのであるが、本音をぶつけることがないから、慕われることもない。お互いにもが言えないという、どうにも冷たい人間関係を作り上げてしまうのだが、自らは建前の世界に逃げ込むという、知能犯的な手法を駆使するのだった。

だから、「間違っていた」とか、「失敗だった」とか、「都合の良いくない」ことは、何がどうあっても言わない。自分のごく狭い周辺の成功談を例え話に用い、その尺度にみんなの意識を合わせるという、ある意味では理に叶ったやり方であるのかもしれないのだが。

子供の頃に、母が意図的に設定したハードルの高さは半端ではなく、恨みにこそ思っても、有り難く思ったことは殆どない。

「この家では、可愛がられたことがない」

四、五歳の頃の健治は、叔母の蒲団に潜り込み、いつもそう訴えていたことを今でも覚えていいる。母の両腕にしっかりと抱かれたという記憶がないのである。可愛がられたことがないと言え、母からすかさず「生まれたときに、しっかりと可愛がった」との言葉が突き返されてくる。

健治は、二階の叔母の部屋を度々訪ねた。姉ちゃん、姉ちゃんと甘えたものだ。叔母は健治の話を逸らそうとしな

いばかりか、歌ってくれたり、面白い話を聞かせてくれた。ろうと、恨めしくてならない。

健治と同じクラスの子らは、そんなに家の仕事はしなくてもいいと言うし、海や川に遊びに行ったり、野球をしたりするのだと言う。何より、少年画報とか冒険王とかの漫画を毎月買って貰い、仲間で回し読みをするのを楽しみにしている。購買店に寄ってアイスキャンディを買ったり、キャラメルをみんなに配ったりする。ラジオで面白い話を聞くのだ、とも言う。

「海や川は危ない。漫画やラジオは不良のもと。キャンディやキャラメルは虫歯になるから、ようない。お前は、口を開けば不満ばかり言うが、何も食べさせていないみたいじゃないか。子供のくせに、学校の帰りに購買店のあたりに群がって、家の手伝いもせず、いったいどんな層の大人になるか、先が思いやられるばかりじゃないか」

クラスの連中のこの話をすると、取り合って貰えないどころか、六尺棒が飛んで来る。目を吊り上げ、怒りに唇を震わせながら怒鳴られるので、早々に切り上げる。

漫画を買って貰わないのは健治だけではないが、借りることが出来たとしても、家で読んでいては怒られる。

健治は金というものを貰ったこともないし、バスで行くらしい郷口町という商店の並ぶ町を見たことがない。

「アーケードちゆうもんがあつて、何十人もが歩きながら、左右の店を覗き込んで行くんじや。余所見でもしとつたら、

白い鬚

ぶつかり合ってしまったらぞ」

「本屋には、新しい漫画が高く積んである。町の子は群がって、ばらばらめくるんじゃない」

「兄貴が自転車買って見に行つた。坂道を上るには、ギア付きが一番いいんだ」

などと、三輪車でよく連れて行って貰う精米所の末広が得意そうに言う。床屋の順二も何度も行っている。農家の長男の太平でさえ、成績が上がった褒美に姉と二人で行つたのだそうだ。「小遣いを貰ってな、それでお土産の煎餅を買って来たら、こんなことせんでよか言うて、また小遣いを貰った」と言う。太平の家は三反百姓なので、父親が工夫作業に出て日銭を稼ぐのだそうだ。

郷口町には、平屋敷のトツシャンでさえ、盆前、頑固者の親父に連れられて行き、アイスクャンデーを買って貰ったのだそうである。「たまにやあ褒美もやらんとな」と、あの親父が言つたという。そこには、春子を長崎に出さなかつたという弱みがあつたのかも知れん、と村中の噂になつたものだ。

勉強は学校でするもんだ、というシズ婆さんと母が言う。躰を守るつもりもあつたが、学校での勉強は、健治には苦にならなかつた。むしろ、授業を聞いていると、楽しかつた。田の草を取るために一日中水に入っている辛さに比べ

な発明や発見をするというくだりだつた。

「そんな暇人のすることの、何が凄いな。最近の学校は、とんでもないことばかり教えてくれるんだねえ。そりゃあ、先生たちは無責任に教科書に書いてあることを教えときゃあいいんだらうけど。いくら自分たちの仕事だとはいえ」

という具合で、困つたもんだと不機嫌になつた。健治には、この話のどの部分が母の機嫌を損ねるのだろうと訝るばかりであり、学校のことを話せばかえって、家で教科書に手を触れることが遠退く、ということになつた。

「国破れて、何の教育ぞ」

と教えられたもんだ。母はことある毎に言う。

「親を思うこともない。先祖を敬うこともない。自分一人が満足しさえすれば何でも出来る…なんて、とんでもないことだ。戦地では、食べるものもなく、熱病や奇病に罹り、敵弾に当たり、ボロボロのまま大勢の若者が死んだんだ。

この内地でも同じぞ。長崎は一発の原子爆弾で街ごと焼かれてしまった。目の玉が飛び出し、腸が飛び出し、髪の毛は焼けただれ、肉の塊をぶら下げた大火傷の連中が、歩いて来る。川棚という海軍工廠の前を、雑巾みたいな人たちが、幽鬼の恰好でよろけながら歩き過ぎるんだ。男か女か見分けもつかぬほどに焼けた人たちが、ものも言わずに運ばれて行く」というあたりで、母はしゃくり上げ始める。川棚というところの海軍工廠に徴用され、魚雷を作

れば、楽しめ晴れ晴れとした気分だ。

授業の中は、もつと三倍くらいのスピードで進めてほしいと願うくらい、まどろっこしなかつた。しかし、初めて耳にする話の、例えば中江藤樹の母の子を思う気持ち、健治には信じられなかつた。

藤樹の学問の障りにならないよう母は、冬の日にあかぎれの葉などを持って、自分の身を案じて訪ねてきた藤樹を追い返すのである。「あなたは学問を積んで、世のためになる人です。母を訪ねる暇などない筈です」という母の深い思いからであつた。母に諭され、雪深い道をとぼとぼ帰って行く藤樹の後ろ姿を、母は涙ながらに見送る、という場面を頭に刻み込んだ健治は、帰るなり母に話した。

感動してくれるに違いないと期待していたら、「いったい、こんな滅茶苦茶な話もなかるう。母を捨てて学問に励むなど、この辺りでは聞いたことがない。何という親不幸な子供だろうか。母も母だけれど、子も子だよ。若いうちから一生懸命に働けば、母も子も楽になれるんじゃないか」と言う母の言葉には、二の句が継げなかつた。

学校で学んだことを時々母に話すことがあつたが、それらは必ずと言ってよいほど、母の考えとは合わなかつた。というより、母を怒らせることになつた。最も怒らせることになるのは、子供が学問を志し、研究し、親は食べるものも食わずに働き、努力の甲斐あつて子供が、終には立派

つていたそうだ。

長崎の空が燃え上がり、夜になつても空が焼けているのを眺め、体の震えが止まらなかつた。翌朝、長崎の方から遅々と歩み、運ばれてくる人々の姿のあまりの惨さと、おびただしい列の長さにもなかつたと言ふ。

母がこのくだりを身振り手振りを交えて説明するとき、健治たちは何も口答えすることが出来なかつた。母は原子爆弾の被災者を、投下の翌日、直に見ているのである。

「運ばれて来る人たちに、将校も兵隊も、年寄りも若者も区別はない。国は終わった。大学出も小学校出も、変わりはない。生まれた場所も、生まれ方も関係ない」

母は、冷たく、激しく言い放つた。

敗戦後は、「ついで数年前まで、食べるものを求めて、町からぞろぞろやって来たもんだ。芋でも麦でも食えるものなら、どれだけでも札束を積んでな。一段も二段も見下していた百姓に、へいこら頭下げて。どんな学問を修めた者でも、食わんことには始まらんから、哀れと言つたらない。こちらも少ない蓄えの中から、譲つてやつた、お互い様だとね」シズ婆さんは、町方から買い出しにやって来る婦人たちには、必ず一合多く譲つていたという。始末することにかけては遅れを取らないシズ婆さんは、どう聞き付けたのか村はずれの原田の家までやって来る人たちに、惜しみ

なく分け与えたと言うから、分からないものだと言判を呼んだことがあったらしい。

シズ婆さんは村一番の意地っばりだ。周りからどう見られるかに一番拘(こま)るけれど、しかし、根っからの根性悪でもないらしいとの評判が立った。シズ婆さんは三歳で貰われて来たためか、養父母たちから特別に哀れみを掛けられるのを嫌った。何かに付け反発するものだから、養父母たちもたいそう手を焼いたという。

小学校では、勉強でも運動でも、とびっきりの一番を貰いたらしい。しかし、養父母から「よう頑張った」と言われるのが気に入らず、「当たり前のことさ」と返したのだそうだ。

そういう反発が高じたのか、周りから同情されたり、周りに遅れたりするのを極端に嫌うということになり、母たちへの厳しい躰(こま)になったものらしい。

「負けるんじゃない。馬鹿にされるんじゃない。後ろ指指されるんじゃない」

いつの間にか、シズ婆さんの掟(おきて)が作られてしまった。「養女だから」と特別扱いされることを、一番の恥だと肝に銘じてきたらしい。元々荒い気性だから、「誰にも負けん」と、男の仕事である田起こしなどの牛使いや鋤の操作も自分でやりこなし、男が担ぐ米俵の量にも負けないだけの量を、遮二無二担いだというのだ。

「親の言うことはちゃんと聞きなさい、ということさ」

「見当違いだよ。第一、人は義務と責任は持たねばならぬけれど、生まれ付き自由平等なんだ」

「またその理屈か。聞く度に頭が痛くなるよ」

母はシズ婆さんに口答えをすることや、おかしいと考えることなど、なかったと言った。

「親に逆らっていたら、何も出来ん。ただでさえ忙しいのに、シズ婆さんの後ろから『どうしてそうなるの』、『何故なの』なんて言っただけで行った日にやどういうことになるのか。恐ろしゅうて、一度だって考えもせんかった」と母は顔を曇(くも)める。

「学校では、将来に向かって勉強し、知恵を生かして、社会の仕組みを考え、頑張つて変えて行かねばならないと習ったよ。稲の品種改良だとか、野菜の品種の改良とか、栽培方法の工夫だとか」

「もういい。そんなことは他人の仕事さ。今、うちは田植への準備でたいへんなんだ。苗代に掛からなくちゃいけないから、あんたは水回りが大丈夫だろうか、すぐに見て来なさい」

「稲作だって、多くの人たちと協力して、短い時間に上手に作業する方法を考えるとか」

「馬鹿なことを言うとする間に、日が暮れちゃうじゃないか。作業じゃなくて、家の仕事だろう。苛(いら)するよ。本当に、

だから、自分がやったことは、子供たちにも当然出来るものだと強いることになる。母の兄が十代に結核で寝込んでいたというから、長女である母にシズ婆さんと同じ役目が課せられたらしい。小学生の頃から、牛を使い、鋤を操り、周りに先駆けて田を起こし、苗を植え、草の伸びる間もなく取り、稲刈りもどこよりも一番早く、収穫も後片付けも一番先にやるのが掟(おきて)になったらしい。

「一寸の棒の先の土地でさえ粗末にしない」

「大切な水の見張りは、怠らない」

「草一本生やすな」

「お国のための食料である」

「戦地の兵隊さんのために、一粒でも多く収穫する」

などと、掟(おきて)の内容は時につれ、徐々に変わって行つたのだそうだが、隠し米などは一粒もしなかったという。

母は健治に対し、怒りを露わにした。健治がことある毎に、「何で」、「どうして」、「おかしいなあ」、「わからない」と食ひ下がるものだから、「口より先に手を動かすな」、「誰に似て、屁理屈ばかり言うんだろ」、「自分の立場を考えんば」と声が荒くなる。さらに、「親に口答えなどするもんじゃない」、「昔は赤紙一枚で戦場ぞ」とくる。

「今は、昔とは違うんだ」

学校は碌なことを教えないんだ。とにかく、へらず口はいらないんだから」

母が傍の六尺棒に手を伸ばしたので、健治は朝飯の箸を飯台に置いたまま、飛び退った。素足にズックを突っ掛け、門口に走り出る。ぶつかりそうになった鶏が、あわてて羽を広げて物置の軒下まで飛んだ。

叔母がいた頃は、学校の話をよく聞いてくれたし、「子供たちはちゃんと勉強して、いろんな仕組みを考えていかなくちや」と言ってくれた。遠足の弁当だって、海苔巻きと卵焼きの入った美味しいものだった。キャラメルも一箱入っていた。でも、一年生の秋に嫁いで行つたから、弁当はそれっきりだ。

母の遠足の弁当といったら、毎日食べる麦飯をアルミの弁当箱にギョツと詰めたものだ。おかずが何も入っていないときも多い。

「腹いっぱい食べれたらいいじゃないか」

母もシズ婆さんからは、遠足の弁当を作ってもらわなかったらしい。そのかわり、自分で握り飯にして、梅干しを入れて風呂敷に包んで行つたと言う。母は、叔母の作る弁当を見ながら、「そんなに甘やかすもんじゃないけどね」と呟(つぶ)いていた。

日曜日は好きになれない。日の出と一緒に起き、大急ぎで飯を済ませると、田や畑や山に出なければならぬ。天

気の良い日は勿論、雨や雪の日でも変わらない。

土が凍り、霜柱が立ち、海からの風が殴りつける日に菜種の苗を植えたのは元旦だった。その日は、何故か父と母と健治の三人だけで、手足や耳の芯までが千切れるほどの寒さの中、曇り空の下で一日を過ごしたのだった。

「正月早々、いったい何ごとで」

余所行き恰好で道行く人たちが、通り掛かりに声を掛けて行った。「よう頑張られますな」とは誰も言わなかった。父も母も、むっつりしていた。健治だけが一緒に仕事をさせられたのは、自分に対する罰なのだろうか、鼻水を零しながら考えてみたが、思い浮かばなかった。

小さな焚き火を囲んで食べた昼飯には、麦飯の横にたくわんが三切れ添えられていた。父も母も何も言わなかった。飯が済むと、父は「火は危ない」と言いながら、長靴の底で火の粉が見えなくなるまで、何度も乱暴に踏み付けた。

水を張った田が見えるところまで走ると、一人トツシャンが五枚下の田にいた。苗の準備も済んでおり、先陣を切るつもりだと見えた。

「早かねえ。いつ来たん」

めったなことでも口をきいたことがないことに気付いた。すぐ近くで仕事をしているのに、間近で顔を合わせたことは殆どない。

「健ちゃんも早いねえ。俺は一時前だ」
「偉いもんだなあ。トツシャンには敵わんち、いつも言われとる」

「そんなもんあるか。俺、勉強が出来んからしようがなからうち、親父が口惜しがつとるけど、出来んもんはしようがな。百姓より外にはなれんもんね」

ほう、と思った。春子を長崎に出さないことで中学校に怒鳴り込んで行ったあの親父が、勉強のことで口惜しがっているとは意外だった。分からんもんだ。健治は鼻を蠢かした。くしゃみが出そうになったのを、懸命に堪えた。

「うちじゃ勉強なんぞ何になるか、とクソミソじゃぞ」という言葉を、飲み込んだ。

「健ちゃん、いったい誰に似たんやろう。いつも、飲んだら親父が言いよるんや」

「誰にも似とらんで、か」

「勉強かて、めちやくちや一番やんか。郡内で絶対一番やろう。親父、ああ言いながら、自分は師範に行きたかったんや。成績も、そこそこやったらしい。だけど、俺には百姓しかない。健ちゃんとは大違いだと言いよる」

聞かない話だった。あの親父が師範にとは思ってもなかった。そう言えば、酒の席で「師範にで行つたら、今頃は教頭ぐらいにはなつとるで」と、父と親父はよく大笑いした。後に、決まって「五反百姓じゃあ、これからは

とても食っていけないぞ。何かええ手はないのか」などと言うのは冗談としか思えなかったのだが。となると、中学校に怒鳴り込んだのは、教員になれなかった自分への鬱憤晴らしでもあったのだろうか。

「どうや水の具合は。日は長くないぞ。てきばきやらんと」長靴をドカドカ踏み締め、くだんの親父が下って来た。長靴が鳴る度に、天秤棒が撓むほどの苗が大きく揺れた。

健治が中学生になったばかりの頃のことだ。母は風呂から出ると、湯上がりの火照りを冷ますためか、長い時間縁先の暗がりでもタオル一枚纏わない裸のままであることがあった。隣家とは三百メートルは離れており、縁先を横切る者はないのだったから、頓着なかった。健治の横に裸の母がいつまでも座っていて、早く着物を着てくれないかと思ふ傍で、「ここまで大きくなってしもうたら、もう腹の中には戻せんもんね」と、含み笑いを交えながら言った。

健治には意味の分からないことであり、多分「大きくなつたねえ」ということを強める意味なのだろうと聞いていたが、肩が触れ合うほどの近さにまでわざわざ来て、何を言いたいのだろうか、と考えないでもなかった。

母の匂いは、父や自分の匂いとは違い、甘酸っぱいものだった。母の方を見ないよう正面に目を据えていても、下半身に奇妙なしびれが走った。

この母の風呂上がりの涼みは、息切れや動悸の具合が悪く、というときを除いての習いであり、健治も母だからとはいえ、女の裸をまともに見せられるのは気詰まりなので、決まって先に逃げ出すことになった。

昼間見る母は、シズ婆さんの掟に従いながら、眉間の皺を緩めることはなかった。家庭訪問などで、「将来が楽しみですよ。担任をやつて、初めて出会いました、これほどの能力の子に」と、健治の成績と進路が話題に出る度に、気分を損なうことになるらしく、胸を押さえて蹲った。動悸が激しくなり、息が切れそうになるのだと言う。

学校の通知簿を持って帰っても、母は中を見ようとせず、シズ婆さんも「お前の仕事は百姓に決まつとるんだから、米も、麦も、野菜も、馬鹿にせず、人並み以上に作つてこそ勉強の成績なんぞ」と講釈を垂れた。

「そらあ、家を継ぐには、まず田畑の仕事をするの倍もせんならん。それが出来、勉強も飛び切りの一番にならば。そうしてこそその知恵ちゅうもんぞ。家を守り、継ぐという心構えをしつかり作らんといけん。長男とは、つまりそういうもんだ」と母よりも強烈な一撃を放つのである。何と言つても、シズ婆さん自身が算盤大会や書き方大会で、島一番を何度も取つて来たというから始末に悪い。

「勉強が少しばかり出来る言うても、それはそれ。勉強が

出来ても、一番大切なことは、家を助け、親を助け、兄弟を助けるという気持ちに自然とならんばじや。今のままの理屈言いの強情っぱりでは、先が危のうてならん。百姓を舐めるもんじやないぞ。人間にとつて一番大切な、食物を作るんじや。人間の体は食物で出来とる。脳ミソも、流れとる血もな」

シズ婆さんは、実父母を見返してやろうと考え、また養父母に対する意地から、誰にも先んじて土にまみれることを厭わなかった。例え勉強が一番でも、ここを逃げないと決めた。だから、自分の道は村一番の百姓になることだと、作文にもずつと書いて来たのだと言う。

健治は小学校以来の健康診断で、常に虚弱だと言われ続け、現に不整脈があり、若年性高血圧だと診断された。

校医を交えて行われた進路決めでは、初回、二度目、三度目と、体が資本の農業にはあまりにも不向きであろうと言われ、適正検査も机上勤務の方に進む方が良いと出た。

初め高校へは出さないという母たちの方針であったのが、机上勤務に就くには高校卒業という資格がやはり必要だろうということ、急遽受験に切り替えたものだった。

幼い頃から、母とシズ婆さんに敵しく躰られて来たのが、やむを得ず進路を変更することになり、「やはり、ダメな子供だったのだ」と、二人を痛く落胆させることになった。

「先祖に申し開きが出来ん」

「福岡の酒には、何やしらん毒が入つとるという。そののあたりは、自分でよう考えんな」

港で別れるときの母の言葉は、これだった。

こういうことを考えていた健治は、目の前の白髪の母の目が、異様に真剣であることを感じた。うちの子ではないのではないかと感じるということは、つまり母自身が疑われている、ということ以外にはないからである。

「うちの子ではないかも知れないと思ったりするのは、父さんとも弟妹ともあまり似ていないし、承知のとおり自分は言い出したらきかん性分だからね。ひよつとして、亡くなった祖父さんなどに似てたりしてるんじやないかと。ほら、隔世遺伝とかよく言われるじやない」

「そんなことは分からん。お前は誰にも似とらんよ。言い出したら聞かん、変わりもんじや。しかし、吉野は好かん源爺など、どれだけの派手好きで、どれだけ遊び呆け、世間を騒がせたことか。嫁さんは十年も逃げとつたし、二人の息子もたいそうな遊び人でな」

祖父の昔原には触れず、源爺の吉野を引き合いに出した。「そうなんだ。でも、吉野の血筋は、楽しい人たちだったと思うけれど。捕まえたメジロをよく見せてくれた。楽しかったよ。口笛もメジロそっくりの上手な音色でね」

「これまでのお前の反抗的な態度からして、皮肉な結果になったもんだ。悔やんでも、悔やみきれないよ。やはりあのとき…」

母は、言葉を濁した。高校でも、成績は常に上位にあつたが、母の落胆は癒えなかった。「何のための高校行きかねえ」と、いつも皮肉を言い出す始末で、「授業の合間は、ちゃんと家の仕事をするんだ」と、中学時代に増して、大人同様の仕事を仕向けて来た。定期考査の期間中であれ、田植え、穫り入れ、葉煙草の収穫と、思い付く限りの仕事を、ときには日付が変わる時刻まで与えた。

「お前に高校の目があるとは考えんかった」

「授業料は、自分でしっかり働いて稼がんと」

ヒステリックに言いながら、授業料は督促が来るまで引き延ばし、「こげな勿体ないこつはなか」と激しく咳込みながら、忌々し気に金をくれた。母は落胆から来たショックからか、以前にもまして息切れと動悸や胸苦しさを訴え、季節の変わり目には一週間も寝込んだりした。

健治は同級生が大学進学を決めていく中、高校以上の上級校に進むべくもなく、母は健治の職が島外に決まったときも、「もう知らんよ。どうにもならん。勝手にすりやあいいさ」という態度をありありと見せた。

「田畑は、草原になつてしまふ」

「笑われることじやろうなあ」

「それよそれ、源爺が死に、源爺の息子たちも六十歳前後で相次いで死んだ。これでようやく、恥ずかしい話を聞かんで済むことになった。かれこれ十年になるな」

「幸子叔母も、七年になるね。大病院の手術が成功した後、老人会や老人ホームでは人気者だったと聞いたけど」

「ホームが、もともと合つたらしい」

「それつて、恥ずかしいことかな。世間の顔ばかり気にして過ごす方が窮屈だし、自分が楽しくて、周りも楽しくさせる方も好きなんだけど」

「何の、世間の口に戸は立てられん。笑顔で挨拶し、後ろを向いた途端に舌を出したりするんぞ」

「それを正直とは言わないのかな」

「原田では、こげな恥ずかしいことはない」

「昔原でも？ だから僕の存在自体、問題だったのかな」

母は、健治の顔から目を逸らし、「もういい。帰りは北の追い風だから、随分楽だろう。渡船場の二階に、最近良い店が出来とる。海鮮丼が評判らしい。乗る前に、寄つてみたらいい」と言いながら、起こしていた体を気怠そうに横にし、寝癖のついた白髪を力なく枕に落とした。

健治の胸に一群の風が絡まり、やがて吹き抜けた。

リハビリ室の卵色のフロアは、変わらない光を放ち、照つていた。

(了)